

子どもたち一人一人の国語の力を伸ばすには、どんな授業を考えればいいのでしょうか。
ここでのヒントをもとに、明日からの授業にチャレンジしてください。

さあチャレンジ!

子どもを伸ばす国語授業のヒント 2

学習場面に合わせた 板書指導の工夫

前青山大学講師 岩崎 保

毎時間、どの教科でも、黒板に学習の目的や内容を書かない先生はいないでしょう。板書は、教師と児童が学習の意図を共有して、学習展開を有効に進める必須条件です。一斉授業の中で、一人一人の児童が学習の問題や方法を認識し、考え、理解し、作業するのに最も頼りにするのが、視覚を通じた板書です。とりわけ、言語活動を学習の主体にする国語教育では、「先生の背中を見て育つ」児童にとって、板書する教師の姿勢や文字の形、文章の確かさに納得して学習意欲を高めていくことは確かです。

一 板書の工夫は学習内容と活動をつなぐアイデアから
「いつ、どこで、何を、どのように」板書するかによって、活用する教具が変わってきます。白・赤・黄などのチョークを

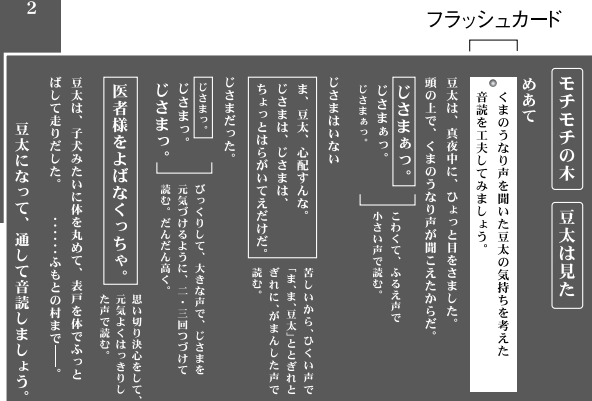
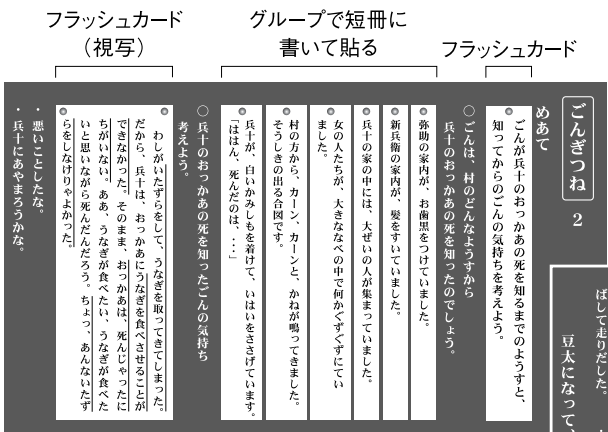
使った手書きの板書が一般的ですが、「学習のめあて」「主な発問」「登場人物の似顔絵・ペープサート」などは、あらかじめフラッシュカードを準備しておく、学習の効率化と児童の思考意欲を促します。このほかにも、OHP、OHC、図・表や写真などを必要に応じて組み合わせると、映像機器を見慣れている児童の理解を高めます。自身の学級作りの願いや児童の関心や実態を理解したうえで、板書計画を立てましょう。

(1) 黒板に余白を作った学習課題を解く工夫例
黒板全面を文字で埋め尽くすのではなく、板書に余白を作り、児童の思考を促すゆとりスペースにしましょう。(例1)は、『ごんぎつね』(四年)で、学習課題を考えるための板書例です。真ん中のスペースには、児童がわかったことを短冊に書いて黒板に貼付します。左のスペースには、「ごんの気持ちを書かれています文章」を視写するためにフラッシュカードを貼ります。

(2) 音読の仕方を考える板書の工夫例
音読の仕方を考える学習でも、板書を工夫することで、どのように読むか、児童が豊かに想像できます。(例2)にある『モチモチの木』(三年)、『豆太は見た』の場面には、「じさまあつ」と「じさまつ」と二つの同じ言葉が出てきます。その先にある「医者様をよばなくっちゃ」までの「豆太の心の変化」を音読で味わう場面として、その時のじさまの声と合わせて、どのように読み分けるかを話し合っ板書する事例です。

(3) 学習のまとめを児童が作る板書の工夫例
(例3)は、『大造じいさんとガン』(五年)の読解の最後で、児童が学習のまとめを作る際の板書の例です。学習課題はフラッシュカードで黒板右側に掲示します。児童はグループごとに、大造じいさんと残雪の戦いの跡を分担して短冊に書き、行動の順に黒板に貼って、経過や感想を発表します。

〈例1〉『ごんぎつね』(4年)



〈例2〉『モチモチの木』(3年)

〈例3〉『大造じいさんとガン』(5年)



あらかじめ設問は板書しておく

(4) 低学年に文章の構想を立てさせる板書の工夫例
低学年の児童に、遠足に行ったときのことを文章にまとめさせる際、「楽しかったことを、思い出シシートに書いて出してください。」と言って、「書きたいこと集め」のシートを児童に配布し、記入させます。そのうえで、ある児童のシートを短冊に書き写して、全員のための例として黒板に貼ります。黒板に貼るときは、児童に確かめながら、「楽しかった順番」に並べるようにします。先頭に来る短冊が、「いちばん楽しかったこと」になるので、これを題名にするよう助言します。あとは、時間の順に書けばいいことを伝えれば、児童は不安なく構想を立てることができます。

(5) 低学年に物語のあらすじを理解させる板書の工夫
低学年の児童に、物語のあらすじが捉えられるようにするには、発話によるやり取りをしながら、それを黒板に書いたり、フラッシュカードを掲示したりして、物語の全体構造(人間の関係)をイメージ化させるようにしましょう。次に掲げるのは『大きなかぶ』(二年)の例です。

T 先生といっしょにお話を読みましょう。初めにタネをまいたのはだれですか。そして、かぶはどうなりましたか。
C おじいさんです。大きな大きなかぶになりました。
T そうでした。さて、「うんとこしょ、どっこいしょ。」(フラッシュカードを掲示する)は、みんな力を入れて読んでください。初めにこう言ったのはだれですか。
C おじいさんです。
T そうですね。(児童が描いたおじいさんの絵を貼り、その下に「おじいさん」と書く)
このように同じ手順で続けて板書を完成させ、「あらすじ」という言葉と一緒に、全体の構想を意識させていきます。



二 ワークシートと二 体化させ、板書作りに児童を参加させる
場面を読み比べ、学習を組み立てる際、どのような板書の工夫があるか、「一つの花」(四年)を例に考えてみたいと思います。初めに、題名から物語を予想し、教材文を通読したり範読を聞いたりして感想を話し合い、登場人物の思いを読み比べるという学習展開になりますが、板書とワークシートを一体化させると、より有効な学習が可能となります。

(1) 第一場面での板書例

〈例4〉は、三時間目に用いる板書の例です。「ゆみ子が最初に覚えた言葉から、どんなことが分かるでしょう。」と発問して、それを書いたフラッシュカードを黒板に掲示します。一斉音読をさせてから、ワークシート「1」を配ります。(ワークシートは、光村図書「小学校国語ワークシート集」にあるものです。課題・設問は、板書例とほぼ同じです。)

①の設問は、「第一場面の書き出しの文を書き写しましょう。」と指示します。この視写はのちの読みのキーワードになりますから、「書き出しの文」と板書し、児童の書写速度に合わせて、ゆつくり板書します。全員が正しく書いたことを確かめてから、自分で書いた文を一斉音読させ、文の正しさと内容を捉えさせます。視写も読解指導です。そして、ゆみ子の幼さや食べ物以外に思いが働かない様子を実感する読みとして、「物語を読む大事なカギになる言葉」キーワードと板書し、説明します。

②の設問は「この言葉を、ゆみ子が最初に覚えたのはなぜでしょう。」と発問してから、手書きで板書します。すぐにわかる児童はどんどんシートに書き始めるでしょう。そこで、手の進まない児童のためにも、いったん全員の手を休めさせ、「戦争がはげしかったころの様子」と書いた「フラッシュカード」を黒板に掲示します。わかった児童には、短冊に書いて黒板に

貼らせませす。板書に、児童も参加するのです。それを見て感想を話し合わせ、その内容を教師が手書きで板書し、キーワードを支える大事な事柄として理解させませす。ゆみ子が「一つだけちようだい」を覚えた理由については、多くの児童の発言を取り入れて板書し、全員が納得したのを確かめてから次に進みます。

③の設問は「『じゃあね、一つだけよ。』と言って、自分の分から一つ、ゆみ子に分けたあたるお母さんは、どんな気持ちだったでしょう。」と発問して、「まとめ・お母さんの気持ちを考える」と書いたフラッシュカードを掲示します。この発問には、児童の個性や体験によって想像の仕方に違いがありますが、発言を簡略に板書するに留め、同じ思いの友達もいることを理解させながら、自分のシートの記述を見直させませす。

(2) 第二場面での板書例

〈例5〉は、七時間目の板書の例です。二場面目の最後の学習です。ここでのめあてとして、「ゆみ子に一輪のコスモスの花をわたしたお父さんの気持ちを想像させませす。」と発問して、それを書いたフラッシュカードを掲示し、ワークシート「4」(前に同じ)を配ります。

①の設問は、「泣きだしてしまつたゆみ子に、お父さんは、どんなことをしてあげましたか。また、そのときに言つた言葉を書きませす。」と一斉音読して、「お父さんがしてあげたこと」と「お父さんが言つた言葉」と二つに分けて板書し、児童の記載を確かめながら指名して発言させませす。前は「プラットホームのごみすて場のような所から一輪のコスモスを見つけてきてゆみ子にわたしました。」とまとめ、あとは「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう。」と板書しておきます。物語のキーワードとして押さえるのです。

フラッシュカード

短冊に書いて貼る

フラッシュカード

一つの花

ワークシート「1」に書いて答えませす。

ゆみ子が最初に覚えた言葉から、どんなことが分かるでしょう。

① 第一場面の初めを書き写させませす。

「一つだけちようだい。」

これが、ゆみ子のはっきり覚えた最初の言葉でした。

○戦争がはげしかったころの様子(発表)

●おまんじゅう、キャラメル、チョコレートもない

●おやつどころではない

●お米の代わりにおいも、豆、かぼちの配給

② この言葉を、ゆみ子が最初に覚えたのはなぜでしょう。(発表)

③ じゃあね、一つだけよ。」と行って、自分の分から一つゆみ子にあたえたお母さんの気持ち(発表)

●まとめ・お母さんの気持ちを考える

お母さんは、かわいそつと思つて悲しかった。

フラッシュカード

フラッシュカード

フラッシュカード

一つの花

ワークシート「4」に書きませす。

ゆみ子に「一輪のコスモスの花をわたしたお父さんの気持ちを想像させませす。」

① 泣きだしてしまつたゆみ子に、お父さんは、どんなことをしてあげましたか。また、そのときに言つた言葉を書きませす。

●「一輪のコスモスの花をあげました。」

ゆみ。さあ、「一つだけあげよう。」一つだけのお花、大事にするんだよう。

② 「一つだけのお花、大事にするんだよう。」の「一つ」にこめられたお父さんの気持ちを想像してみませす。

●お母さんを大事にするんだよ。

③ 一輪のコスモスの花をもらつたゆみ子の様子

●お父さんに花をもらつと、キヤツキヤツと足をばたつかせておびませす。

④ 一つの花にこめられたお父さんの願い

〈例5〉『一つの花』(4年)第2場面

子どもといっしょに視写する

②の設問につなげて「大事にするんだよう。」と言つたときのお父さんの気持ち」と板書して考えさせ、ワークシートにまとめてから発表させませす。児童から様々な想像が出てくることを予想して、スペースのゆとりをもつて板書していきます。

③の設問は、「一輪のコスモスの花をもらつたゆみ子の様子」のフラッシュカードを掲示し、記述して発表させませす。「キヤツキヤツと足をばたつかせて喜んだ」と言うところにサイドラインを引いて「そのわけ」を想像して発表させることもできます。

④の設問は、「一つの花にこめられたお父さんの願い」というフラッシュカードを掲示し、記述して発表させませす。それぞれに想像したことは、その児童の思いとして尊重させませす。的はずれな想像があつたら、個別に指導するようにさせませす。

三 よい板書の条件とは

板書には、「学習の契機を作り出す」「思考力や創造力を伸ばす手がかりを与える」「正しい認識や理解を助ける」「集団学習を助ける」など、多くの意義があります。板書は児童と教師の合作であり、その目的は「学ぶ者の立場に立つ」ことが原点です。板書すべき事項は、教師と児童がともに考え出し、作り出し、選り出していくべきものです。児童の思考の流れが大切にされなければ、「生きた価値ある板書」とはなり得ませせん。

最後に、どんなときに書けば、めあてに即した板書となるかを挙げておきます。

- 学習事項や目的がはっきり認識されていないとき
- つまずきがあつたり、学習展開が停滞したりしているとき
- 正確に理解させ、学習促進を図りたいとき
- 共同思考を促すきっかけを作つたり、発展させたいとき
- 比較検討や独創的な発想を生かしたいとき